

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：35410

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381293

研究課題名(和文) 中1ギャップの解消に特化した道德教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of moral education programs focused on resolving the first-year student gap in junior high school

研究代表者

森川 敦子 (Morikawa, Atsuko)

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：00628745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近年教育問題となっている「中1ギャップ」の解消に特化した道德教育プログラムを開発することであった。本研究の結果、中学1年生の学校不適応感を解消するためには、ソーシャルスキルトレーニングと、思いやりや規範意識の育成を図る道德授業を組み合わせた4～6時間の道德教育プログラムが有効であることが明らかになった。
本研究では、生徒の対人的適応感を高める4月用の道德教育プログラム5種類と9月用の道德教育プログラム3種類を開発した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop moral education programs that would solve the "junior high school first-year student gap," which has become an education problem in recent years. As a result of this research, it was proven that a 4-to-6 hour moral education program combining social skill training and moral education classes aiming to nurture consideration and normative consciousness is effective in solving feelings of maladjustment to school in first-year students in junior high school.
In this research, we developed five types of moral education programs for use in April and three types of moral education programs for use in September to improve the social skills of the students.

研究分野：道德教育

キーワード：道德教育 プログラム開発 中1ギャップの解消 対人的適応感の向上 規範意識の向上

1. 研究開始当初の背景

近年、中学校1年生の学校不適応による不登校や問題行動等、いわゆる中1ギャップをめぐる問題が教育問題の一つとして指摘されている(中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』2008)。中学1年生の学校不適応は、入学後、5~6月頃には表面化し始める。一度不適応を起こしてしまった生徒には個別的、長期的な支援が必要となる。そのため、生徒が入学初期に不適応を起こさないことが大切である。

文部科学省によれば、中学1年生が学校不適応を起こす最も大きな要因の一つは、友人関係をめぐる問題とされている(文部科学省『平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』2012)。したがって、中1ギャップ解消のためには、特に、対人的適応感を向上させる取組が有効であると考えられる。これまで、児童生徒の対人的適応感を高めるために、小学校と中学校の連携カリキュラム等によってスムーズな連結を図る取組や生徒指導によって生徒理解を促進する取組、SST(ソーシャルスキルトレーニング、以下SSTとする)等を用いた取組等が実践され、一定の効果を上げている(例えば岡山県立矢掛町立矢掛中学校「小学校同士の交流授業」『総合教育技術2月号』小学館、2009;国立教育政策研究所生徒指導研究センター「中1不登校の未然防止に取り組むために」2005、等)また、近年は、道徳授業と他の教育活動を組み合わせる道徳教育の重要性が指摘され、具体的な道徳教育プログラムの開発も進められている。しかし、文部科学省が指摘するように中1ギャップ問題は十分に解消されているとはいえない(図1参照)。本研究は、中1ギャップの問題を担任が教室で実践できる道徳教育プログラムによって解消しようとするところに特徴がある。このように中1ギャップの解消

に特化した具体的な道徳教育プログラムはまだ開発されていない。

これまでの研究から、児童生徒が安心して学級で学べる受容的な道徳的雰囲気醸成するためには、発達段階に即した規範意識の育成が有効であること(森川敦子、学位論文、2008)や規範意識の向上がよりよい友人関係や教師との関係の構築につながる事が明らかにされている(中谷素之『社会的責任目標と学業達成過程』風間書房、2006;高橋均「児童のアサーションと学級風土認知の関連」『学校教育相談研究』日本学校教育相談学会16、2006)。研究代表者は、この点に着目して、不適応生徒への効果的介入の為の道徳教育プログラムを開発し、その効果検証を行った。その結果、生徒の対人的適応感の向上のためには、向社会的性の育成と規範遵守意識の育成の二つの要素が必要であることを明らかにした(森川敦子、科学研究費奨励研究「道徳的雰囲気醸成による不適応生徒への効果的介入の為の道徳教育プログラムの開発」研究成果報告書、2011)。さらに同じ教材であっても、先に向社会的性を育成し、その後規範遵守意識を育成する組み合わせの方が、対人的適応感や規範意識の向上に効果的であることを明らかにした(森川敦子・鈴木由美子「対人的適応感を向上させる中1ギャップ解消のための道徳教育プログラム」日本道徳教育学会第82回大会発表要旨集、2013)。

ただ、森川の研究で開発した道徳教育プログラムで用いた教材は限定的なものであった。したがって、多くの中学校での汎用性と本プログラムの効果をより高めていくためには、学校や生徒の実態に合わせた多様なプログラムの開発が求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、まず中1ギャップに関する道徳教育上の課題を明らかにする。そして、

中1ギャップを解消するための道徳教育プログラムを開発し、その有効性を検証する。これらを通して、中1ギャップの解消に特化した複数の道徳教育プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

研究 では、予備調査により中学1年生の対人的適応感を向上させるための有効な教材を明らかにするとともに、入学直後の中学1年生を対象とした調査を実施し、対人的適応感を向上させる道徳教育プログラムの構成要素と効果的な組み合わせ方など、プログラム開発の理論基盤を明らかにする。

研究 では、研究 で得た知見に基づき、中学入学直後の生徒を対象に、SSTと道徳授業を組み合わせる2種類の道徳教育プログラムを作成し、それぞれの効果について比較検討する。これにより、効果的な4月用の道徳教育プログラムの特徴を明らかにする。

研究 では、研究 、 で得た知見に基づき、中学入学直後の学校適応感向上のために、SSTやグループワーク等のアクティブラーニングを取り入れた3種類の4月用の道徳教育プログラムを開発し、それぞれの効果について比較検討する。これにより、より効果的な4月用の道徳教育プログラムの特徴を明らかにする。

研究 では、中学1年生の学校不適応が入学直後だけでなく、長期休業明けの9月頃にも高まるという指摘を受け、9月用の道徳教育プログラムについても検討することとする。具体的には、対人的適応感や規範意識の向上を図る9月用の道徳教育プログラムを3種類開発し、その効果を検討する。

4. 研究成果

研究 では、予備調査により中学1年生の対人的適応感を向上させるための有効な教材を明らかにするとともに、入学直後の中学

1年生を対象とした調査を実施し、対人的適応感を向上させる道徳教育プログラムの構成要素と効果的な組み合わせ方など、プログラム開発の理論基盤を明らかにした。研究によって示唆された点は、次の3点である。

本道徳教育プログラムは、対人的適応感の向上に効果的であった。SSTは、友達関係を構築するスキルがあると感じる意識の向上に効果的であり、規範授業と組み合わせることによって、友人関係が良好だと感じる意識や孤立やいじめなどの拒否的な友達関係がないと感じる意識の向上にも効果があることが明らかになった。

規範意識の向上が対人的適応感に影響を与えることが明らかになった。ここから、生徒同士の人間関係づくりだけでなく、ルール遵守の雰囲気醸成し、規範意識を育成することが生徒個人の対人的適応感を高めることにつながることを示唆された。このことは、中学1年生の不適応感を減少させるためには、個々人へのアプローチを行うだけでなく、同時に学級全体の道徳的雰囲気づくりを行う必要があることを示すものである。

以上から、中学1年生の対人的不適応感を減少させ、学校不適応を未然に防止するために効果的な道徳教育プログラムの要素として、向社会的スキルの育成と規範意識の育成の両方を含む必要があることが明らかになった。

研究 では、研究 で得た知見に基づき、中学入学直後の学校適応感向上のために、SSTやグループワーク等のアクティブラーニングを取り入れた2種類の4月用の道徳教育プログラムを開発し、質問紙調査をもとにそれぞれの効果について比較検討した。研究

で開発した道徳教育プログラムは各6時間で1つは、対人関係スキルを育成したり、よい友人関係の作り方について考えさせたりするSST授業(2時間)、思いやりや親切等の向社会性を育成する道徳授業(2時間)

規範や社会的責任に対する意識を育成する道徳授業(2 時間)の順に組み合わせる道徳教育プログラム(Aタイプ)であった。もう1つは、SST(2 時間)、規範や社会的責任に対する意識を育成する道徳授業規範授業(2 時間)、思いやりや親切等の向社会性を育成する道徳授業(2 時間)思いやり授業(2 時間)の順に組み合わせる道徳教育プログラム(Bタイプ)であった。各道徳教育プログラムの教材内容や指導過程は共通とし、組み合わせの順序だけを変えて構成した。研究 によって示唆された点は、次の3点である。

中学1年生の対人的適応感や規範意識を向上させるためには、AタイプのようにSST や思いやりを育成する道徳授業によって、学級に、まず温かく受容的な道徳的雰囲気や他者への思いやりを醸成し、その後でルールや規範についての指導を加えていく組み合わせの道徳教育プログラムが効果的である。

研究 では、Aタイプにおいて、思いやり授業の後に規範遵守意識が向上した。このことから、生徒の規範遵守意識を向上させるためには、温かい道徳的雰囲気の中で、他者への思いやりや共感をしっかりと育成する取組が効果的であることが示唆された。

これまで規範意識を高めるために、決まりの大切さについて考えさせたり繰り返し指導したりする取組が多く実践されてきた(19)しかし、本研究から、生徒の規範遵守意識を高めるためには、SST や道徳授業によって温かい受容的な雰囲気を醸成し、その上で思いやりの気持ちや他者への共感を育成する取組が効果的であることが明らかになった。本研究の結果は、今後の生徒指導の在り方にも新たな示唆を与えるものといえる。

道徳教育プログラムを開発する際には、道徳教育プログラムの要素だけでなくその組み合わせ方にも配慮する必要がある。今回、比較検討した2つの道徳教育プログラム

は、教材自体は同じで、組み合わせの順序だけを変えたものであったが、その効果には違いが見られた。したがって、道徳教育プログラムを開発する際には、どのような教材を用いるかだけでなく、そこで醸成される道徳的雰囲気なども考慮しながら、前後の授業とのつながりにも配慮した道徳教育プログラムを構成していく必要性が示唆された。

研究 では、中学1年生の学校適応感向上のために、SST やグループワーク等のアクティブラーニングを取り入れた2つのタイプの道徳教育プログラムを開発し、質問紙調査をもとにそれぞれの効果について検討した。研究 で開発した道徳教育プログラムは各4時間で、1つは、ソーシャルスキルトレーニング1つは、対人関係スキルを育成したり、よい友人関係の作り方について考えさせたりするSST 授業(2 時間)に思いやりや親切等の向社会性を育成する道徳授業(2 時間)を組み合わせる道徳教育プログラム(Aタイプ)であった。もう1つは、SST(2 時間)に規範や社会的責任に対する意識を育成する道徳授業規範授業(2 時間)の順に組み合わせる道徳教育プログラム(Bタイプ)であった。取り入れたアクティブラーニングは、ミニゲーム、グループワーク、グループディスカッションなどであった。研究 によって示唆された点は、次の3点である。

SST 等のアクティブラーニングを取り入れた道徳教育プログラムは、特に、対人的適応感の低い生徒の対人的適応感を高めるために効果的である。

中学1年生の入学後に実施する道徳教育プログラムとしては、SST の後に向社会性を育成する道徳授業を組み合わせる方が、対人的適応感の低い生徒だけでなく、集団全体の対人的適応感の向上にも効果的である。

道徳教育プログラムの効果を高めるためには、アクティブラーニングを取り入れる等の学習活動だけでなく、教材の内容や組

み合わせ方も工夫する必要がある。

研究 では、中学 1 年生の対人的適応感や規範意識の向上を図る 9 月用の道徳教育プログラムを 3 種類開発し、その効果を検討した。

それらのプログラムの 1 つ目は、対人関係スキルを育成したり、よい友人関係の作り方について考えさせたりする SST(2 時間)と、思いやりや親切等の向社会性を育成する道徳授業(以下思いやり授業と記述、2 時間)を組み合わせる道徳教育プログラム(A タイプと記述)であった。2 つ目は、SST(2 時間)と思いやり授業(1 時間)と、規範や社会的責任に対する意識を育成する道徳授業(以下規範授業と記述、1 時間)を組み合わせる道徳教育プログラム(B タイプと記述)であった。3 つ目は、SST(2 時間)と規範授業(2 時間)を組み合わせる道徳教育プログラム(以下 C タイプと記述)で、いずれも 4 時間で構成した。A タイプを実施したのは 3 クラスの生徒 89 名(男 39 名、女 50 名)、B タイプを実施したのは 3 クラスの生徒 89 名(男 39 名、女 50 名)、C タイプを実施したのは 3 クラスの生徒 88 名(男 40 名、女 48 名)であった。タイプ分けについては、A 中学校の 1 年生担任及び道徳教育推進教師、生徒指導主事を中心に、生徒の対人的適応感と規範意識の実態及び担任教員の経験年数等を考慮して、各タイプができるだけ均質になるようにした。授業は学級担任が実施した。研究 によって示唆された点は次の 2 点である。

自己受容や他者理解を促す SST は 2 時間程度の短期間でも、生徒の友人との関係をつくるスキルをもっていると感じる意識、並びに対人的適応感の低い生徒の友人関係が良好だと感じる意識の向上に有効であることが示唆された。したがって、中学 1 年生の対人的適応感を向上させる夏休み明けの道徳教育プログラムの要素として、自己受容や他者理解を促す SST は有効であると考えられる。

今回開発した道徳教育プログラムの中では、SST に思いやりや友情をテーマとする道徳授業を組み合わせるタイプが、男子生徒並びに対人的適応感や規範意識の低い生徒の対人的適応感や規範意識の向上に有効であることが示唆された。したがって、夏休み明けに実施する 4 時間程度の道徳教育プログラムとしては、SST と他者への思いやりや友情をテーマとする道徳授業の組み合わせによって温かい道徳的雰囲気醸成するようなプログラム構成がより有効であると考えられる。

なお、研究 、研究 、研究 で用いた道徳教材は以下の通りである。

【ソーシャルスキルトレーニング用教材】

「私はこんな人」JKYB 研究会『JKYB ライフスキル教育プログラム中学生用レベル 1』東山書房、A-(4) (個性の伸長)

「よい友だちのレシピ」JKYB 研究会『JKYB ライフスキル教育プログラム中学生用レベル 1』東山書房、(友情、信頼)

「私はこんな人～自分を見つめ伸ばして～」諸富祥彦『ほんもののエンカウンターで道徳授業中学校編』明治図書(向上心、個性の尊重)

「その気持ちわかるよ!」相川充・佐藤正二『実践! ソーシャルスキル教育 中学校』図書文化社、(友情、信頼)

【思いやりについて考えさせる教材】

「ちがいの意味を見直す」『中学校道徳 1 きみがいちばんひかるとき』光村図書、(思いやり、感謝)

「旗」あかつき、(思いやり、友情)

「バスと赤ちゃん」あかつき、(社会連帯、思いやり)

「おばあちゃんの指定席」あかつき、(思いやり、感謝)

「ちいちゃんをつめ」東京書籍、(友情・信頼)

【社会や規範について考えさせる道徳教材】

「民主主義と多数決の近くて遠い関係」光村図書、(社会規範)

「償い」広島市教育委員会『規範性をはぐくむための教材・活動プログラム』

A-(1)(自由と責任、遵法精神)

「貫戸朋子さんの葛藤～国境なき医師団～」広島市教育委員会『規範性をはぐくむための教材・活動プログラム』(社会的役割、責任、生命の尊さ)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

森川敦子、鈴木由美子、高橋均(2016), 对人的適応感を向上させる中1ギャップ解消のための道徳教育プログラムの教材の組み合わせ方を変えた2つの道徳教育プログラムの比較を通して」日本道徳教育学会『道徳と教育』No.334、p.41-p.51、査読有。

Atsuko Morikawa, Yumiko Suzuki, Hitoshi Takahashi, Kyoko Mukugi(2017) The Morality Learning Program to Eliminate School Maladjustment in Adolescent Students, Educating for Democratic and Global Citizenship Volrme2, World Council for Curriculum and Instruction, pp.165-175. 査読有。

森川敦子、鈴木由美子、高橋均(2018), 夏休み明けの学校不適応の解消に効果的な道徳教育プログラムの開発 開発的生徒指導の視点を踏まえた中学1年生への取組に着目して、平成26年度～平成29年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金 基盤研究(C))研究成果報告書中1ギャップの解消に特化した道徳教育プログラムの開発(研究課題番号26381293) p39-49、査読無し

[学会発表](計3件)

森川敦子、鈴木由美子、高橋均「中1ギャップ解消のための道徳教育プログラムの開発～アクティブラーニングを活用して～」第86回日本道徳教育学会(秋季大会)岡山大学、2015

Atsuko Morikawa, Yumiko Suzuki, Kyoko Mukugi, Yuka NAKAI, Hitomi FUJII, The Morality Learning Program to Eliminate School Maladjustment in Adolescent Students, WCCI 17th World Conference in Education, Budapest, Hungary. July 11, 2016.

Hitoshi Takahashi, Atsuko Morikawa, Yumiko Suzuki, Social Responsibility Goals Influence Feelings Regarding Adaptation to School in Junior High Students, The 6th Asian Congress of Health Psychology, Yokohama, Japan, July 23-24, 2016

[図書]なし

[産業財産権]なし

[その他]なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

森川敦子(Morikawa Atsuko)

比治山大学、現代文化学部、教授

研究者番号:00628745

(2)研究分担者

鈴木由美子(Suzuki Yumiko)

広島大学、大学院教育学研究科、教授

研究者番号:40206545

高橋均(Takahashi Hitoshi)

広島大学、大学院教育学研究科、講師

研究者番号:40523535

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者

椋木香子(Mukugi Kyoko)